



筑紫女学園大学リポジット

The Acceptance and Inheritance of Traditional Culture at Sports Festivals : The Case of Junior High Schools in Okinawa Prefecture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮平, 喬, MIYAHIRA, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/38

体育祭における伝統文化の受容と伝承

— 沖縄県の中学校の場合 —

宮 平 喬

The Acceptance and Inheritance of Traditional Culture at Sports Festivals:
The Case of Junior High Schools in Okinawa Prefecture

Takashi MIYAHIRA

研究の背景と目的

沖縄県には多くの伝統芸能・文化が存在しており様々な形で国内外に伝播している。国外への伝播については「世界のウチナーンチュ大会」にその一端が見て取れる。「世界のウチナーンチュ大会（図1）」とは移民^{注1）}として沖縄から海外にわたった県系人が沖縄に集結し、沖縄人としてネットワークの強化を図る目的で開催されているものである。本大会開催のきっかけは、西銘順治元知事^{注2）}がアメリカのアトランタを訪問した際に、沖縄県人会の盛大な歓迎を受けたことによる。遠い地で暮らす沖縄からの移民の多さと彼らの故郷に対する強い思いに感銘した知事が、海外県系人の世界的ネットワークの構築を思い立った。この事業は行政主導のもと5年に1度開催され、参加人数も年々増加傾向にあり、1990年に始めた大会も2011年10月の大会で第5回を終えた。本大会における内容は、沖縄の伝統文化の交流にとどまらず、ビジネス、人材育成まで視野に入れており、沖縄県内、県外、海外の県系人のネットワークの構築を図る場となっている。表1が示す主要イベントスケジュールの伝統文化に関する交流に着目してみると、「やる気元気旗頭フェスタ」「世界エイサー大会」「空手道・古武道交流祭」「流舞・空手・奉納演舞（武）」「舞へ誘い」が設けられている。これは、現地で伝統文化を育み、又は修練している者と本場沖縄で、それに携わる者との交流及び再勉強の場が設けられていることが理解できる。それは、見方を変え、県系人によって、海外のあらゆる地域において、沖縄の伝統文化である武道、舞踊が盛んに行われている証であり、沖縄の伝統文化を県系人自身が発信源になって伝統文化の伝承、伝播に貢献している可能性も考えられる。国際的な視野に立ち、上記のような大きなプロジェクトを実施するには、経済面や情報発信力などを考えても行政の力が必要不可欠である。その一方で、文化の受容や伝承には、地域に根ざした活動も必要であろう。その観点からみると、エイサーは部落単位で独自の演じ方を持っていて、成果を披露する場も、市町村合併に伴って4つの祭りを統合した「うるま市のエイサー祭り」、沖縄市が中心となって行われる「全島エイサー祭り」、沖縄県青年団協議会が主催する「青年ふるさとエイサー祭り」など多く存在しており、地域から発信される伝統文化の伝承が垣間見られる。

今回の研究対象としている教育機関に目を向けると、小学校及び中学校の学習指導要領の道徳の内容に郷土の伝統文化との関わりが目標として掲げられている。中学校では「地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める」と記されている（文部科学省、2008）。関連して、中学校の体育の授業では学習指導要領の改訂による「武道とダンスの必修化」が始まった。沖縄県教育庁保健体育課（2010）によると、体育で武道の実施種目について、最も多いのが、沖縄が発祥とされる空手道で69.9%、次に柔道15.3%、剣道8.8%、相撲3.4%である。一方、ダンスの実施種目は、郷土の踊りが35.2%と最も多く、フォークダンス23.6%、リズムダンス26.4%、創作ダンス15.1%であった。

この現状を鑑みると、道徳の目標の一つである「各地域の伝統と文化を尊重しその創造を図る」という主旨を内包した形で武道とダンスの課目が、実施されていると考えてもよい。すなわち、授業を通じて伝統文化を伝えるという目的は概ね達成されていると捉えることができるだろう。その反面、地域社会と接点を持つ学校行事を通じた伝統文化の伝承については検証が十分だとは言えない。特に体育祭のプログラムに関する資料が乏しく、編纂資料としては表2が示す明治期のものしか見当たらない。

真栄城（1993）が検証した調査資料によると、沖縄県で運動会が開催されるようになったのは、明治20年代である。最初の運動会は、森文部大臣^{注3}の来沖を契機に開催されたとある。表2が示すように、大規模な運動会は、明治28年の日清戦争後の凱旋祝賀教育大運動会や明治31年の勅語下賜記念大運動会、同37年の旅順陥落記念大運動会で、その特徴は、軍事色の強い内容になっている。少なくとも、明治期における運動会において、沖縄の伝統文化がプログラムとして採用されていないのが確認できる。教育現場と伝統文化との関係を学ぶ意味でも昭和初期及び沖縄の本土復帰前後の時代を含めた縦断的な研究が急がれる。

以上の事を踏まえ、本報では沖縄県の中学校の体育祭を通じた伝統文化の受容と伝承をあり方とその意義について知見を得ることが目的とした。



図1 第5回世界のウチナーンチュ大会のポスター

表1 第5回 世界のウチナーンチュ大会 主要イベントスケジュール（10月12日の前夜祭パレードは除く）

会場	10月13日	10月14日	10月15日	10月16日
A				
B	開会式	チャンプルー交流祭	チャンプルー交流祭	やる気元気旗頭フェスタ 閉会式
C		交流ステージイベント	交流ステージイベント	交流ステージイベント
D			国際親善 ファミリーフットサル大会	
E		国際親善 ゲートボール大会		
F	ワールドバザール	ワールドバザール	ワールドバザール	ワールドバザール
G	世界・平和・未来展	世界・平和・未来展	世界・平和・未来展	世界・平和・未来展
H			世界エイサー大会	世界エイサー大会

会場	10月13日	10月14日	10月15日	10月16日
I			世界エイサー大会	世界エイサー大会
J		空手道・古武術交流祭	空手道・古武術交流祭	
K			翔べ！ 尚巴志	
L		コンサート	琉球の風 琉球クリエイティブ と琉球舞踊	
M		ワールドビジネスフェア	ワールドビジネスフェア	
N		ワールドウチナー シンポジウム	ワールドウチナー シンポジウム・交流会	
O	移民資料展他	移民資料展他	移民資料展他	移民資料展他
P			我が住むは5大州	我が住むは5大州
Q	流舞・空手 奉納演舞（武）			
R	舞への誘い	舞への誘い、安全祈願		
S			NHKのど自慢（予選）	NHKのど自慢

*筆者により簡略表記などの改変を行った。

表2 明治期の沖縄県下連合大運動会プログラム（真栄城、1993）

凱旋祝賀教育大運動会 明治28年	勅語下賜念大運動会 明治31年	旅順陥落記念大運動会 明治37年
沖縄県下2区3郡	沖縄県下2区3郡	沖縄県下2区3郡
1 教育勅語奉読 2 君が代斉唱 3 矯正術 4 徒手体操 5 亜鉛体操 6 球竿体操 7 軍歌・行進 8 中隊運動 9 柔軟体操・撃剣 10 祝砲 11 戴囊・匍競争 12 旗取り競争 13 一人一脚 14 二人三脚 15 運送舟競争 16 障害物競争 大元帥陛下万歳	1 君が代吹奏 2 君が代斉唱奏 3 教育勅語奉読 4 矯正術 5 徒手体操 6 亜鉛体操 7 柔軟体操 8 捕鷄競争 9 中小隊教練 10 中隊運動 11 旗取り競争 12 中止 13 一人一脚 14 二人三脚 15 遠距離競争 天皇皇后両陛下万歳	君が代斉唱奏 教育勅語奉読 1, 2 美容術 3-5 遊戯 6-9 徒手競争 10, 11 徒手体操 12-17 遊戯 18-24 徒歩競争 25, 26 ボートレース 27 美容術 28 遊戯 29 球竿体操 30 徒手体操 31 美容術 32 遊戯 33-36 スプーンレース 37-38 自転車競争 39-40 徒手体操 41 中隊教練 42-45 一人一脚 46-47 二人三脚 48-55 徒歩競争 56 高等小選 57 金メダル競争 58-60 来賓競争 天皇皇后両陛下万歳

研究方法

伝統文化の受容と伝承という観点から沖縄県の中学校の体育祭を対象に、下記の手法と手順で調査した。尚、身体活動を伴う伝統文化という位置づけのもと、本調査では郷土の踊りとして、「琉球舞踊^{注4)}」「エイサー^{注5)}」、武道として、「琉球古武術^{注6)}」「空手道」を沖縄における伝統文化として定義した。

【1】質問紙法（郵送調査法）

(1)調査の対象

沖縄県の中学校163校の中から、休校中の中学校、小学校併設中学校、私立中学校、及び全学の生徒数が40名以下の中学校を除外した、111校に対し郵送調査法によるアンケート調査を実施した。尚、アンケートの回収率は、39.6%であった。

(2)調査期間

2011年6月～8月

(3)調査内容

ア 実施概要

「琉球舞踊」「エイサー」「琉球古武術」「空手道」の演目それぞれに対し行われる学年、性別、指導者、そして演目に対する保護者の反応について回答を求めた。それぞれの選択肢は以下の通りである。

[学年] 1年生 2年生 3年生 学年混合(全学年) その他

[生徒の性別] 男子生徒 女子生徒 男女混合

[指導者] 体育教師 外部指導者 体育教師と外部指導者

[保護者の反応] とても良い 良い あまり良くない 良くない

イ 各演目に対する具体的な内容

琉球舞踊とエイサーについては用いる曲目（踊り）、空手道については演武した「形」の名称、「約束組手^{注7)}」の有無、琉球古武術は用いた武器について回答を求めた。

ウ 体育祭に伝統文化を取り入れる目的、生徒の取り組む姿勢、学校内の体育教師自身の演目の経験、伝統文化の伝承に関して回答を求めた。それぞれの選択肢は以下の通りである。

[各演目を取り入れる目的（選択肢より3つ選び回答）]

郷土愛を持たせる 伝統文化を学ぶ機会 協調性を養う

保護者からの要望 表現力をつける 達成感を得る

[教師からみた生徒の取り組む姿勢]

とても積極的である 積極的である やや消極的である 消極的である

[学校内の体育教師自身の伝統文化の経験の割合]

体育教師全員が経験している 体育教師の約2/3が経験している

体育教師の約半分が経験している 体育教師の約1/3が経験している
体育教師全員が未経験である

[演目を取り入れることが沖縄の文化を伝承につながるとするか]

とても思う 思う あまり思わない 思わない

(4)統計処理

各質問に対する回答の出現率を検討するため、クロス集計に関して χ^2 検定を用い統計処理をした。得られた結果が、検定の条件を満たしていないケースに対して（5以下の期待度数が全体の20%以上、又は、1未満の期待度数が1つでもある場合）、正確確率検定を行った。有意水準は5%未満に設定し、統計処理にはSPSS ver.21.0 for windowsを用いた。

【2】インタビュー調査及びプログラム内容の精査

上記のアンケート調査では得ることのできない質的な情報や活動の詳細な内容を把握するため面談、又は電話での聞き取り調査を行った。

(1)世界のウチナーンチュ大会の概要

第5回世界のウチナーンチュ大会事務局にて、その主旨や経緯及びプログラムに関する具体的な運営方法について尋ね、回答を得た。

(2)外部指導者への調査

K青年会の代表者と、直接面談を行い本来の活動概要及び体育祭におけるエイサーの指導に関わる具体的な方策等について聞き取り調査を行った。

(3)琉球古武術の概要

F琉球古武術保存会の代表者に、琉球古武術の成り立ち、武器の使い方等について解説を求めた。

(4)他県の大学における沖縄県人会活動の概要

他県への沖縄の伝統文化の伝承、伝播への関連性を検証するため、九州の2大学、関東の1大学における沖縄県人会の活動について、聞き取り調査を行った。活動の概要として活動の目的、具体的な活動内容、他大学との交流、エイサーの経験について調査した。

(5)福岡県（福岡地区・筑豊地区）の運動会・体育祭のプログラム内容

福岡県の福岡地区の小学校1校及び筑豊地区で行われる小学校1校と中学校5校の運動会及び体育祭のプログラムをもとに演目の傾向を調べた。その際に資料収集に携わった中学校体育教師とプログラム内容の検証を行った。

結 果

[1] 沖縄県内中学校の体育祭における伝統文化の実施状況

(1)体育祭のプログラムにおける伝統文化の有無と各演目の頻度

体育祭のプログラムに沖縄独自の伝統文化を取り入れているかを調査した所、現在も取り入れているが79.07%、以前は取り入れていた13.95%、取り入れてないと回答した学校が6.98%という結果だった。続いて、現在も取り入れている、以前は取り入れていたと回答した学校に伝統文化の種目の頻度について尋ねた。図2が示すように、エイサーが52.3%と最も多く、次に空手道18.5%、琉球古武術12.3%、琉球舞踊9.2%、その他7.7%という結果になった。その他の回答の中には、創作獅子舞、西東の棒振り、太鼓、ハーリー船、旗頭があった。

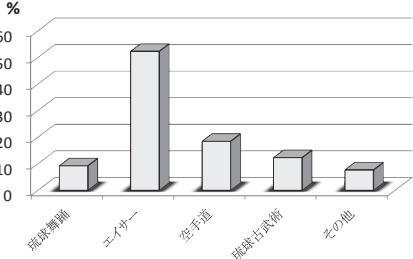


図2 伝統文化の演目の頻度 (複数回答)



図3 琉球古武術「棒」の演舞



図4 琉球古武術の武器エイク上級者になると教授される

(2)伝統文化演目と学年と性別

体育祭で行われる演目が学年や性別によって偏りがあるのか検証を行った。表3は各学年が実施した演目の頻度を示している。本調査において学年混合とは、3学年全員で行うという意味で選択肢を設けていたが、「その他」の分類において、例えば1年生と3年生、2年生と3年生などの組み合わせで実施された事例が多いことから複数学年と名をうち回答欄に加えた。

表3 伝統文化演目と 学年

	1年生		2年生		3年生		学年混合		複数学年		合計
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	
琉球舞踊	0	0.0	0	0.0	1	16.7	3	50.0	2	33.3	6
エイサー	0	0.0	0	0.0	15	42.9	14	40.0	6	17.1	35
空手	3	25.0	1	8.3	0	0.0	5	41.7	3	25.0	12
琉球古武術	1	12.5	1	12.5	2	25.0	1	12.5	3	37.5	8
その他	0	0.0	0	0.0	1	20.0	3	60.0	1	20.0	5
合計	4	6.1	2	3.0	19	28.8	26	39.4	15	22.7	66

$p<.05$

全体的に伝統文化の演目には、学年混合で行うケースが39.4%と最も多かった。また、伝統文化演目と学年との間に統計上、有意な差異が認められた ($P<.05$)。特に琉球舞踊とエイサーについては1・2年生の単学年で行うことはなかった。続いて伝統文化演目と性別との関連についても、統計上、有意な差異が確認された ($P<.001$)。表4が示すように琉球舞踊では女子生徒のみが83.3%と最も多く、空手道、琉球古武術については、それぞれ男子生徒のみが66.7%、75.0%と多く、男女混合も多少みられるものの女子のみの演目としては実施されてなかった。エイサーについては男女混合が79.4%と最も多かった。

表4 伝統文化演目の性別による傾向

	男子生徒		女子生徒		男女混合		全体
	N	%	N	%	N	%	
琉球舞踊	0	0.0	5	83.3	1	16.7	6
エイサー	6	17.6	1	2.9	27	79.4	34
空手	8	66.7	0	0.0	4	33.3	12
琉球古武術	6	75.0	0	0.0	2	25.0	8
その他	2	40.0	0	0.0	3	60.0	5
全体	22	33.8	6	9.2	37	56.9	65

$p<.001$

(3)伝統文化演目に対する保護者の反応

表5は、教師からみた伝統文化演目に対する保護者の反応を示している。演目全体では「とても良い」56.7%、「良い」41.7%と全体の約98%で、保護者には高い評価を得ているという回答が多かった。演目の違いによる保護者の反応については、「とても良い」に着目してみると、琉球古武術、71.4%、エイサー、65.6%、が高い評価を示したが、演目による保護者の反応について統計上の有意な差異はなく、両者の関連は認められなかった (n.s.)。

表5 伝統文化演目に対する保護者の反応

	とても良い		良い		あまり良くない		良くない		全体
	N	%	N	%	N	%	N	%	
琉球舞踊	2	33.3	4	66.7	0	0.0	0	0.0	6
エイサー	21	65.6	11	34.4	0	0.0	0	0.0	32
空手	5	50.0	5	50.0	0	0.0	0	0.0	10
琉球古武術	5	71.4	1	14.3	1	14.3	0	0.0	7
その他	1	20.0	4	80.0	0	0.0	0	0.0	5
全体	34	56.7	25	41.7	1	1.7	0	0.0	60

n.s.

(4)伝統文化演目に対する指導者

表6は伝統文化演目の指導を誰が担っているのか示したものである。統計上、指導者と演目との間に有意な差異は確認されなかった (n.s.)。各演目に対する指導者は体育教師が27.3%、外部指導者20.6%、体育教師と外部指導者が協力して行うケースが52.4%であった。

表6 伝統文化演目に対する指導者

	体育教師		外部指導者		体育教師と外部指導者		合計
	N	%	N	%	N	%	
琉球舞踊	2	33.3	2	33.3	2	33.3	6
エイサー	6	18.2	6	18.2	21	63.6	33
空手	7	58.3	1	8.3	4	33.3	12
琉球古武術	1	14.3	3	42.9	3	42.9	7
その他	1	20.0	1	20.0	3	60.0	5
合計	17	27.0	13	20.6	33	52.4	63

n.s.

この結果から、伝統文化演目に対する指導に外部から協力者が大きく関わっていた事が明らかになった。

図5は外部指導者の内訳を示している。最も多い回答が青年会で51.2%、次に地域サークルが19.5%、PTAが4.9%、青年会と保存会4.9%、青年会と婦人会2.4%、青年会と保護者2.4%となり、青年会と連係をとりながら、指導をしている様子も伺えた。また、OBによる指導2.4%、個人で指導2.4%、不明9.8%となった。

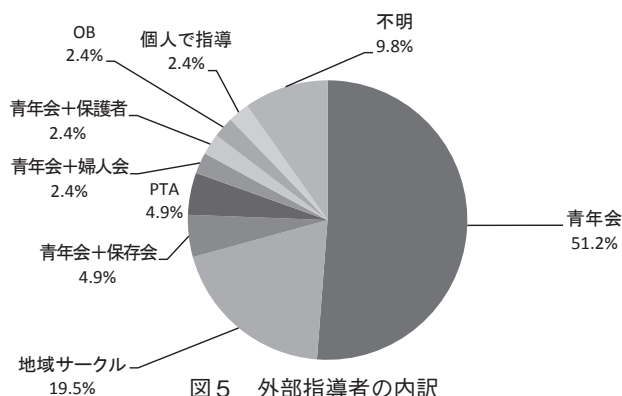


図5 外部指導者の内訳

〔2〕 伝統文化の受容と伝承に対する理念と実際

(1) 沖縄の伝統文化を取り入れる目的

図6は、体育祭に沖縄の伝統文化を取り入れる目的について示したものである。その結果、「伝統文化を学ぶ機会」が31.8% 「郷土愛を持たせる」31.0%で、「協調性を養う」10.0%「表現力をつける」11.8%「達成感を得る」12.7%「保護者からの要望」1.8%であった。

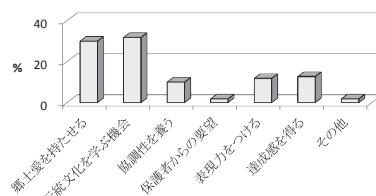


図6 体育祭に伝統文化を取り入れる目的（複数回答）

(2) 体育教師自身の伝統文化の経験

図7は各学校に所属する体育教師の中でどれだけ伝統文化の経験しているのか、その割合についての回答である。結果より、「全員経験している」60.0%、「約2/3が経験している」12.5%「約半数が経験している」20.0%、「約1/3が経験している」2.5%「全員が未経験である」5.0%という結果になった。

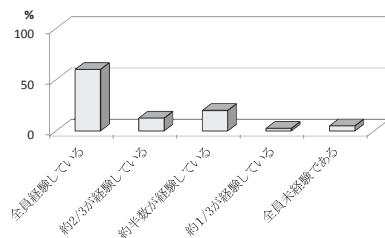


図7 体育教師の伝統文化の経験

(3) 教師からみた生徒達の取り組む姿勢

教師からみた伝統文化演目に対する積極性を尋ねた所、「とても積極的である」20.5%、「積

極的である」71.8%、「やや消極的である」7.7%、「消極的である」0.0%となった。

(4) 体育祭で伝統文化の経験と文化伝承

沖縄の伝統文化演目を体育祭で経験することが、文化を次世代へつなぐと思うか回答を求めた。その結果、「とても思う」55.8%「思う」44.2%で、「あまり思わない」「思わない」それぞれ0.0%であった。

[3] 県外の大学における沖縄県人会の活動

沖縄県外の大学には、沖縄県出身者で集う県人会が多く存在する。ここでは3大学から、聞き取り調査した結果を表7に示している。活動の内容に着目してみると、2大学にエイサーの披露することが挙げられており、学生自身も小中学校で経験があった。

表7 大学の沖縄県人会の概要

	A大学	B大学	C大学
部員数	約70名	約75名	約100名
男女比	8：2	4：6	5：5
活動の目的	交流の場 沖縄の文化を知ってもらう	文化を広げる 後輩の面倒	交流の場 後輩の面倒
活動内容	文化祭にて 模擬店の出店	文化祭にてエイサー 地元の祭り 老人ホームにて演舞 幼稚園にて演舞	学園祭にてエイサー
部員の活動	積極的	積極的	積極的
他大学との交流	あり	あり	あり
エイサーの経験	小中学校であり	小中学校であり	小中学校であり

[4] 福岡県（筑豊地区・福岡地区）の運動会演目

福岡地区の小学校2校と筑豊地区の中学校7校の運動会及び体育祭のプログラムから、演目を「競技・競争系」「表現系」「地域やPTAとの合同演目」「地域独自の演目」「生徒会演目」に分類した。表8が示すように、全体的な割合としては競技・競争系演目が多く、68.6%をしめる。次に表現系の演目が20.7%、地域やPTAとの合同演目が5.7%、生徒会演目は2.9%であった。この事例においては、本地区独自の演目を用いているものは、2.1%と僅かであった。

表8 福岡県（筑豊地区・福岡地区）の小中学校における運動会、体育祭演目の一例

小学校・中学校	競技・競争系	表現系	地域とPTAとの合同演目	地域独自の演目	生徒会演目
a小学校	12	4	1	1	
b小学校	13	5	1	1	
A中学校	11	4	0		1
B中学校	10	2	0		3
C中学校	8	3	3		0
D中学校	9	5	1		0
E中学校	10	5	1	1	
F中学校	10	0	1		
G中学校	13	1	0		
合計	96	29	8	3	4
%	68.6	20.7	5.7	2.1	2.9

考 察

1. 体育祭における伝統文化演目に関する実態と運営手法からみた伝統文化の受容と伝承

本研究では、沖縄県の中学校を対象とし学校行事における伝統文化の実施状況について調査した。その結果、過去の実績含め、回答の約9割以上の中学校で実施経験を持ち、学年や性別において実施状況に偏りがみられた。加えて、プログラムに対する生徒の取り組みは、積極的で保護者の反応も好感がもてるものであった。また、演目の指導において体育教師のみならず、青年会を中心とした外部からの協力体制が大きな支えとなっていた。体育祭における地域独自のプログラムの傾向を示した資料が乏しいことから、福岡県の一部地域をサンプリングし比較を試みたが、沖縄県ほど地域独自の演目を実施していないことが窺えた。この結果については、調査規模を拡大し資料収集、分類、分析が必須だということを前提としているが、伝統文化を恒常的に取り入れる体育祭は沖縄県の特長の一つと思われる。

伝統文化を演目別にみると、最も顕著に実施されていたのはエイサーだった。今回の調査でエイサーに最も多く使用する曲は、軽快なテンポと明るい曲調から、華やかに座を締める曲で結婚式などお祝いの場でよく用いられる「唐船ドーイ」、先祖を敬う曲で「安里屋ユンタ」、「久高万寿主」、「仲順流行り」、男女の恋愛を歌った「かたみ節」、加えて「7月エイサー」が上位をしめた。また、「平和の琉歌」や「三線の花」など現代の曲もあった。

K中学校のエイサーでは、音源にCDを用いず、生徒自ら三線を引き、唄を歌い演じていた。このような事例は、方言の習得をはじめ歌い手と演奏の技術習得等、多くの時間を有したことが考えられる。生徒の積極的な取り組みと努力が、保護者からの高い評価に繋がっていることが推察できる。また、エイサーに関しては、外部指導者の役割が大きく、中でも地域の青年会の貢献が大きい。K青年会代表者からの聞き取り調査では、メンバーは50～70名で年齢は20代前半が多く、主な活動内容として祭りなどの行事の手伝い、清掃活動、成人式の見守りである。具体的な体育祭に対する指導については、体育教師と相談の上、本番の数ヶ月前から公民館で体育教師や生徒の代表者に動きを覚えてもらい、ある程度、習得できたら、学校に戻り全体で練習するという段取りで行われていた。青年会のメンバー自身が子どもの頃、演舞の指導を受けた経験を持ち、自らもそれを後輩へ還元する使命感を備えており、この活動は青年会にとって、「子ども達の教育の場」と考えているという意見があり、エイサーの指導のみならず、子ども達を地域で支えるという高い意識を持ち合わせていた。K青年会のような生徒に対する献身的な活動は、全ての地域で同様なことがされているかは確認していない。

エイサーは大学の沖縄県人会の主な活動となっていた。披露の場は学園祭、地域の老人ホームや幼稚園、お祭りにも呼ばれることもあるということだった。県人会代表者への聞き取り調査では、学園祭でのエイサーが「プログラムの取りをとる」又は、「エイサーをみるためにきた」という人々もいて、県人会活動の原動力にもなっていた。伝承と伝播という視点でみた場合、国内においては、各大学に存在する沖縄県人会が、その役割を担っているように思える。県人会のメンバーも小中学校でエイサーの経験があり、それが学校行事や地域活動を通じて文化を他の地で披露していること

は、その文化を伝播しているとも捉えることもできる。エイサーは、沖縄県人のつながりを強固にするとともに、そのアイデンティティーを表現するアイテムとなっていることが示唆される。加えて、中津川（2007）の調べによると、沖縄以外の地域のエイサー団体が、北海道、東北、関東、東海、近畿、四国と全国に多く点在し、団体結成にいたる経緯では、「沖縄を離れた沖縄出身者が中心に関わって始めた」ケースが多く、本場沖縄のエイサー団体のつながりもあり、直接指導を受けた経験があるという実態もあった。この調査結果から大学県人会とは異なった形で沖縄から国内へエイサーが伝承されていた。文化を伝承されていく背景には、文化を受容した者が伝えていく様相がみられた。この流れは、県外の沖縄県人会の活動と共通する点であった。

空手道に関しては、男子生徒のみで行う場合が約6割強で、男女混合も約3割みられた。指導者については体育教師が担うことが多く、空手経験者がいることが読み取れる。これは先に述べたように、武道の授業に空手道を取り入れる割合からも同様なことがいえる。体育祭で披露される空手道の具体的な内容は、形の演武が主であり中には約束組手を行う学校もあった。形は初心者向けの平易な普及型Ⅰ・Ⅱ型や二十四歩を用いていた^{注8)}。

琉球古武術の実施は男子生徒のみで行うことが多かった。琉球古武術は、本土の古武道と異なり空手と両輪の関係にあり、沖縄では空手と並行して学ぶことが多い。琉球古武術で用いる武器は数種あるが、体育祭の中で用いられていたのが「棒」の演武であった。棒は武器の中では、技術の順次性からみて初級レベルで習得するものである。技術習得の観点から考えても、「棒」を選択するのは極必然であろう。琉球古武術の棒は、本来旧盆の間、各地域の青年会が行うエイサーとも関係が深く、時代や地域にもよるが、エイサーの集団が道を練り歩く際、その先頭に古武術の心得がある者が棒をもって行進していた。その役目は、露払いの意味とハブから身を守る安全対策を兼ねていたとも言われている。

琉球舞踊に関しては、他の演目に比較し実施されている学校は少なかった。女子生徒だけで行うことが多く、保存会、婦人会などの外部指導者の協力で成り立っていた。琉球舞踊は琉球王朝時代に、中国からの冊封使を歓待するために披露され発展した舞踊で、「古典舞踊」「組踊り」「雑踊り」「創作舞踊」に大別されるが、用いられた演目には、戦後に生まれた創作舞踊に相当するマミドーマ節、商業演劇の中で生まれた雑踊りで八重山民謡の繁昌節であった。郷土の踊りとして、琉球舞踊の古典舞踊は、その歴史が示すように沖縄を代表する伝統芸能で格調高さを醸し出している。それゆえ、教授の仕方に困難を要することや体育祭という場に適したものを考慮した結果、本調査では軽快なリズムで明るい曲調のものを選んでいると推察される。

2. 今後の展望と研究の課題

学校体育で行われているスポーツが一般化し社会に定着していることを考慮すると、教育現場で用いられる様々な行事は、社会への伝播に寄与しているものと捉えることができる。本調査においても、体育祭での伝統文化の体験を通じて、郷土で生まれ、受け継がれてきたものを次世代へ伝承することを目的に行われていた。そのような目的意識を持つ背景には、指導の立場にある体育教師自身が伝統文化の経験を持つことが一つの要因として考えることができる。所属する中学校の体育

教師全員が、その経験があるという回答が約6割弱あることは、上記の目的を達するのに有益であることに体育教師自身が確信をもっている可能性がある。それは、ほとんどの教師が体育祭での伝統文化の経験が、文化の伝承につながると考えているという結果からも論証を補償するものであろう。そして、伝統文化を取り入れる目的に対する評価を生徒の取り組む積極的な姿勢から判断すると、概ねその目的が達成できているとも考えることができる。多くの知識や知見を得るためには様々なメディアを通した情報発信を受信し選択することになるが、上記のように受容したものを伝承するというステージにいくためには「経験」が重要な要素となる。身体活動を通して動きを覚えていなければ、伝承するためには困難を要する。指導する立場にある体育教師、青年会、沖縄県人会、県系人は共通して、伝統文化の経験をもつ。体育祭の場で生徒が伝統文化を経験することは、伝統を継承する誘因となろう。それを長く継承し定着させていくためには、文化を受容したものが伝承し、それが伝播していく、そして、それを他者へ受容するといった好循環を保つことが大切だと思われる。学校の生徒と外部指導者、体育教師と外部指導者、世界各国でみられる伝統文化の交流など人的な関係に信頼関係がなければ成立しないことを考慮すると、好循環を保つためには、よりよい人と人のつながりが基本となると考えられる。

田淵（2002）によると、エイサーのタイプは、先祖供養の目的の下、各集落の青年会のメンバーによる伝統的なエイサーと先祖供養の目的を持たず、使用音楽や振り付けにおいて創作的傾向が強く、旧盆だけに照準を合わせず、季節に関係なく演舞を披露し、団体の構成メンバーには青年会のような地域的な結びつきはないタイプがある。後者の創作エイサーは新しい担い手であると述べている。新しい担い手となる創作エイサーを演じるグループは、外部指導者の全体の20%を占めている「地域サークル」が該当すると思われる（図5）。学校側が協力を取り付ける際、青年会ではなく、エイサー含めた伝統芸能を学習しているサークルに依頼するケースもあり、今後、青年会とつながりを持ってない学校は、その選択肢として考えるのは必然であろう。時代の流れの中、新しい担い手に引き継がれた場合、青年会のように子ども達を地域で支えるという役目を果たすかどうかは不明である。外部指導者の変容が伝統文化の伝承にどのような影響を及ぼすのか注視していきたい。

本研究の見解で留意することは、巨視的で国際的な視野に基づいた事業と草の根で行う地域での活動との接点については調査を行っていない点にある。調査サンプルの数も不十分であり、地域による温度差の有無の検証も必要であり、加えて、小学校や高校等の教育機関の実態についても情報収集することが望まれる。文化が受容され次世代へ継承し、よりよく循環するには、そこに空洞化が生じないことだと考えられる。その実態を明らかにすることを今後の課題としたい。

注

注1）沖縄県は北米、南米をはじめ世界各地に約40万人もいる日本有数の移民県である。

注2）1921年沖縄県南城市生まれ、1978～1990年まで沖縄県知事を務めた。

注3）初代文部大臣に就任し日本の近代学校教育制度確立の基礎づくりに貢献した。

注4）琉球舞踊は、発生した時代別に琉球王朝を中心に発展した「古典舞踊」や「組踊り」、王朝崩壊後、商業演劇の中から生まれた「雑踊り」、戦後に生まれた「創作舞踊」の三つに大別される。

- 注5) 沖縄において旧盆の時期に踊られる先祖供養のための踊り
- 注6) 琉球古武術の武器に関する諸説では、石臼の取っ手から「トンファー」、馬具から「ヌンチャク」、船のオールから「エイク」など、主に生活用具から武器が作られたとされている。
- 注7) 予め攻めて手と受け手を決めて、攻撃する場所を約束して行う組手
- 注8) 伝統空手の普及発展のため、初心者向きの平易な型を創作した。普及型Ⅰは、首里手系の長嶺将真師範が草案し、普及型Ⅱは、那覇手系の宮城長順師範が「撃砕（げきさい）」の型を一部改めた。

文 献

- 第4回世界のウチナーンチュ大会実行委員会 2007 第4回世界のウチナーンチュ大会実行委員会報告書
宜保栄治郎 1996 琉球舞踊入門 那覇出版社
- 外間哲彦 1999 沖縄空手道・古武術の真髄 那覇出版社
- 出村慎一 2007 健康・スポーツ科学のためのSPSSによる統計解析入門 杏林書院
- 久万田 晋 2011 沖縄の民俗芸能論 ボーダーインク
- 真栄城 勉 金城文雄 平良勉 1992 戦前の沖縄における運動会の歴史年表 [研究資料]
琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部 (41): 299-306
- 真栄城 勉 1993 明治期の沖縄県における運動会に関する歴史的研究 琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部 (42): 293-302
- 文部科学省 2009 小学校学習指導要領解説体育編 東洋館出版
- 文部科学省 2008 中学校学習指導要領解説保健体育編 東洋書房
- 中津川祥子 2007 「沖縄以外の地域におけるエイサー団体について」お茶の水大学音楽論集 第9号
- 仲本正博 1993 沖縄伝統古武道 文武館
- 沖縄県教育庁保健体育課 2010 平成22年度学校体育・運動部活動に関する調査 沖縄県教育庁保健課
- 佐久田繁編 2004 琉球王国の歴史 月刊沖縄社
- 高宮城 繁他 2008 沖縄空手・古武道事典 柏書房

付 記

本論文は2011年度九州体育・スポーツ学会第60回記念大会で行われた学会企画シンポジウム（テーマ：スポーツの伝播と受容・変容）にて発表した内容を再検証し、一部加筆したものである。

（みやひら たかし：人間科学科 人間形成専攻 准教授）